慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『嶺外代答』の麻離抜国と乳香・(二)
Sub Title	The country of Ma-li-pa (Mirbat) and Ju-hsiang perfume (Milky Incense) mentioned in Ling-wai-tai-ta (II)
Author	池永, 佳昭(Ikenaga, Yoshiaki)
Publisher	三田史学会
Publication year	1978
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.49, No.1 (1978. 7) ,p.69- 84
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19780700-0069

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『嶺外代答』の麻離抜国と乳香・(二)

池永佳昭

目次

一、序
二、『嶺外代答』の本文
三、本文(B)・(C)・(D)の考察
四、むすび

一、序

本稿は前稿「『嶺外代答』の麻離抜国と乳香・(一)」(『史学』四十八巻四号)につゞく小文で、(一)で考えた「広東――麻離抜間の貿易航路」をもとに、貿易港・麻離抜国の物産と商品(特に乳香)、風俗について『嶺外代答』・麻離抜国の記述を中心に考察したいと思う。特に物産については乳香を中心とし、『嶺外代答』と同様に北宋代の内容を伝えていると思える南宋『諸蕃志』(一二二五年)の乳香の記述からも考えてみたいと思う。

二、『嶺外代答』の本文

『嶺外代答』巻三、外国門下、大食諸国の条、麻離抜国の全文は次の通りである。〔 〕は前稿・(一)で考察した文を示す。

(A) 〔有麻離抜国。広州自中冬以後発船。乗北風行約四十日到地名藍里、博。買蘇木、白錫、長白藤、住至次冬。再乗東北風六十日順風方到。〕

(B) 此国産乳香、竜涎、真珠、琉璃、犀角、象牙、珊瑚、木香、没薬、血竭、阿魏、蘇合油、没石子、薔薇水等貨皆大食諸国至此博易。

(C) 国王官民皆事天。官豪皆以金線桃花帛纏頭、搭項以白越諾金字布為衣、或衣諸色錦、以紅皮為履、居五層楼、

(D) 食麵餅、肉、酪。貧者乃食魚、蔬。地少稲、米。所産

果実甜而不酸。以蒲桃為酒。以糖煮香薬為思酥酒。以蜜和香薬作眉思打華酒、暖補有益。

(E)　〔以金・銀為銭。巨舶富商皆聚焉。〕

(F)　〔哲宗元祐三年（一〇八八）十一月大食麻囉抜国遣人入貢、即此麻離抜也。〕

三、本文(B)・(C)・(D)の考察

(A)・(E)・(F)については前稿で考えた部分であるので、次に(B)・(C)・(D)の文について考えてみたいと思う。

(一)　本文(B)・乳香と乳香樹

『嶺外代答』には乳香と乳香樹についての説明はなく、ただ麻離抜国（アラビア半島南岸 mirbaṭ 地方）の物産あるいは貿易品としての品目の中に乳香が産するとのみ記されていたにすぎない。ところが乳香はこの地方の重要な代表物産かつ商品であり、前稿・(一)で述べたように宋代、スマトラ島の三仏斉国を経由して中国の広東、泉州等の港にも運ばれた。すなわち乳香あっての麻離抜国といえよう。そこで次に宋代の史料から乳香と乳香樹について考えてみたいと思う。

乳香（frankincense）は学名を *Boswellia carterii* Birdw., Burseraceae といい、*Boswellia* 属の九種のうち五種がアラビアに産し、二種が熱帯アフリカ、一種が熱帯西アフリカ、一種がインドの乾草丘地帯に産するという。そしてアラビア産の五種のうち一つは *B. carterii* Birdw., でアラビア半島南岸の Hadramaut, Dhofar 地方に産する。他の四つは Socotra 島に産するもので、(1) *B. ameero* Balf., (2) *B. elongata* Balf., (3) *B. javanica* Turcz., (4) *B. Socotrana* Balf. があるという。(1)

まづ、南宋『諸蕃志』（一二二五年）巻下、乳香の条に次の記述がある。

(a1)　乳香一名薫陸香。出大食之麻囉抜、施曷、奴発三国深山窮谷中。其樹大槩類榕。以斧斫株、脂溢於外結而成香、聚而成塊、

(b1)　以象輦之至于大食。大食以舟載易他貨于三仏斉。故香常聚于三仏斉。(イ)番商貿易至、舶司視香之多少為殿最。

(c1)　而香之為品十有三。其最上者為揀香、円大如指頭、俗

所謂滴乳是也。次曰鮮乳、其色亜於揀香。又次曰鮮香。言収時貴重之置於鮮中。鮮香之中又有上中下三等之別。又次曰袋香、言収時止置袋中、其品亦有三如鮮香焉。又次曰乳榻、蓋香之雑於砂石者也。又次曰黒榻、蓋香色之黒者也。又次曰水湿黒榻、蓋香在舟中為水所浸漬而気変色敗者也。品雑而砕者曰斫削。簸揚為塵者曰纏末。皆乳香之別也。

この記事は紹興二十一年（一一五一）に書かれた葉庭珪『香譜』（陳敬『新纂香譜』所収）から多くを引用し、さらに新しい情報を書き加えていると思える。(2)『香譜』の記述は次の通りである。

(a_2)〔葉庭珪云〕一名薫陸。出大食国之南敷千里深山窮谷中。其樹大抵類松、以斤斫樹、脂溢于外結而成香、聚而為塊。

(b_2)以象轝之至於大食。大食以舟載易他貨于三仏斉。故香常聚于三仏斉。三仏斉毎歳以大船至広與泉。広泉二舶視香之多少為殿最。

(c_2)而香之品十有三。其最上品者為揀香、丸大如指頭、今俗所謂滴乳是也。次曰瓶乳、其色亜于揀香。又次曰瓶香。言収時量重、置于瓶中。在瓶香之中又有上中下三等之別。又次曰袋香、言収時只置袋中。其品亦有三等。又次曰乳榻、蓋鎔榻在地雑以沙石者。又次黒榻、香之黒色者。又次曰水溼黒榻、蓋香在舟中為水所浸漬而気変色敗者也。品雑而砕者曰斫削、簸揚為塵者曰纏末、此乳香之別也。

次に両文を比較し、乳香がどういうものであったかを考えてみたいと思う。

(1) 葉庭珪の文・(a_2)と趙汝适の文・(a_1)

この文には乳香の産地と乳香がどういうものであるかが述べられている。乳香の一名「薫陸」*hiun-luk*の解釈についてはヒルト、ロックヒル両氏、ペリオ氏、山田憲太郎氏等の解説がある。(3)本稿では省略したいと思う。

産地については十二世紀の葉庭珪の頃の知識では、大食国（バクダード地方）の南数千里の「深山窮谷中」に産し、乳香樹は松の木に類すると考えられていた。その後約七〇数年後の『諸蕃志』には麻囉抜、施曷、奴発三国の深山窮谷中に乳香が産出するとあり、以前より正確な説明がなさ

れているといえる。まづ、麻囉抜国は『嶺外代答』本文・(F)の麻離抜国のことと思え、前稿・(一)で述べたようにアラビア半島南岸 Mirbaṭ のことであろう。(4) つぎに、施曷 Shi-ho 国は十三世紀、マルコ・ポーロ『旅行記』の Eshier (=Escier) 国のことと思え、ハドラマウト海岸地帯の Shehr (=Ash Shihr) のことであろう。(5) この国についてマルコ・ポーロの『旅行記』は次のように述べている。

「この都市にはすばらしい港があります。そして多くの船と多くの商人が沢山の商品を載してインドからこの地にやって来ます。さらに付け加えれば、この都市から多くのすばらしい軍馬と二つの鞍を置ける〔ほどの〕名馬が数多く貿易商人によってインドに持たらされるのです。それらの馬は非常に貴重かつ高価でありますので、商人達は沢山の〔馬〕を手に入れそして莫大な利益を得ているのです。

この地方にはものすごく沢山の量の良質の白乳香が産しますし、それにやはり沢山の量のなつめやしの実を産するのです。また、わずかばかりの米ときびを除いては穀物を産出しませんので、商人達は他の諸国からこの地に穀物を持たらし、莫大な利益を上げているのです。この地方は魚が豊富で、特に品質の良い大きな鮪がとれます。すなわち、あまりにも多く取れるものですから、ヴェネチア貨幣で一グロッソもだせば大きな鮪を二匹も買えるのです。この地方の人々は米、肉、ミルク、それに魚を常食としています。この地にはブドウ酒はありませんが、砂糖・米・なつめやしから一種の酒を作ります。〔それは〕非常にいい味なのです。(6)」

奴発 Nu-fa 国は前稿・(一)で引用した明、馬歓の『瀛涯勝覧』の祖法児国、同じく費信『星槎勝覧』の佐法児国、十四世紀のイブン・バットゥータの『旅行記』の Zhafâr 地方のことと思える。現在の Dhofar 地方にあたる。(7) マルコ・ポーロの『旅行記』には Dufar 国として解説されており、乳香樹についても述べられている。いわく、

「この都市は海岸に位置しており、すばらしい良港があります。その港には多くの商人が多くの船で寄港し、驚くほどの沢山の量の商品を持たらすのです。さらに付け

加わえれば、沢山の良馬がアラビアや他の国々からこの地に持たらされ、貿易商人がこれを沢山購入するとともに莫大な利益を上げているのです。

さらに、この都市に属する都市や小都市が数多くあります。

また、さらに付け加えれば、この地にはとてもすばらしい乳香がものすごく沢山産出するのです。そこでその採出方法を話しましょう。それはあまり大きな樹ではなくて、小さなもみの木ぐらいです。この木の幾つかの部分にナイフで切口をつけます。そうすると、その切口から雫がしたたり、固まるのです。それが乳香です。さらに、このような切口をつけなくても、非常な高温の為に木にある種のゴム状の汁ができることがあります。これもまた乳香なのです。このインセンス（焚香料）はインドに輸出される馬とともに非常に大きな取り引きがなされるのです。」(8)

以上のように『諸蕃志』によれば乳香の産地はアラビア半島南部の麻囉抜（Mirbaṭ）、施曷（Ash Shihr）、奴発（Dhofar）三国深山窮谷中とのことであったが、アラビア南岸地方の乳香の産地を調査したVan Beek氏によると、アラビアにおける乳香（*Boswellia carterii*）の産地は東経五十三度〇分から五十五度二一分までの間のDhofar地方にかぎられ、かつ、中央沿岸平野からQara山脈の北側の低斜面にいたる地域に産するという。そして、かって、アラビアにおける商品しての大量の乳香を産したのはこの地帯のみであった、というのが同氏の見解である。また、Bertram Thomas氏によると、この地帯は夏の季節風によって生じる雨量地帯にあたるという。(9) 施曷国すなわちマルコポーロのEshier国は現在の地図上のDhofar地方には位置していないが、『諸蕃志』によれば麻囉抜、施曷、奴発三国の「深山窮谷中」に乳香が産するというのであったから、貿易港であったこれら三国の山中に産地があることを説明されたのではなかろうかと思える。

(2) 葉庭珪の文・(b_2)と趙汝适の文・(b_1)

乳香が麻囉抜（麻離抜）、施曷、奴発三国から陸路を象で大食（バクダード方面）に運ばれ、大食から故臨、三仏

斉、中国へと運ばれた旅程については前稿・㈠で考えたので、ここでは傍線(イ)について考えてみたいと思う。

『諸蕃志』・(b1)の「番商貿易至」という文からは中国におけるアラブ商人等（番商）の寄港地がどこになるのか判断できないが、葉庭珪・(b2)には「〔三仏斉〕以大船至広〔州〕與泉〔州〕」とあるので、たぶん(b1)（現行『諸蕃志』）では「広與泉」が脱字になっているのではなかろうかと思える。あるいは泉州のみに来航したと書かれていたのかもしれない。

次に「舶司視香之多少為殿最」についてであるが、「舶司」とは葉庭珪・(b2)から考えると広州と泉州二舶〔司〕のことであろうと思える。ただ、明の周嘉胄の『香乗』巻二、香品の条「薫陸香即乳香」に引く所の『葉廷珪香録』（葉庭珪『香譜』のこと）には、

……三仏斉毎年以大舶至広與泉、広泉舶上視香之多少為殿最……

とあり、広州と泉州市舶司の係官が「船上」で乳香を調べたようにも受けとれる。そういう場合もあったことであろうが、(b1)と(b2)の記事から考えると「舶上」は「舶司」の誤字ではなかろうかとも思えるが如何であろうか。

次に「香之多少為殿最」についてであるが、これはすでにヒルト、ロックヒル両氏の英訳文にあるように、市舶司の係官が乳香のサンプル（多少）を取り出して等級（殿最、最が上物で、殿が下級品を意味しているように思える。）をつけたという意味ではなかろうかと思える。

(3)　趙汝适の文・(c1)と葉庭珪の文・(c2)

この文には乳香の等級十三級について記されている。おそらく広州と泉州市舶司等の区分方法であったように思える。『諸蕃志』・(c1)をもとに分類してみると次のようになる。

(1)　揀香　　かんこう。乳香のうち最上の物を言う。まるくして大きくて指頭ほどもある。一般に「滴乳」と言われるものがそれである。

(2)　毬乳　　へいにゆう。揀香よりも色が悪いものを言う。

(3)～(5)　毬香　へいこう。(2)につぐもの。これら(1)～(5)

までは高級品（貴重）なので採取時に鉼（瓶またはガラスビン）に入れられたと言う。

(6)～(8) 袋香　たいこう。採取時に袋の中に入れられるもの。

(9) 乳榻　にゅうとう（榻は塌とも書く）。砂、石とまじっているものを言う。

(10) 黒榻　こくとう。(9)に次ぐもので黒色なるものを言う。

(11) 水湿黒榻　すいしつこくとう。船中に水が入り、それが乳香にしみこみ香が黒く変色し、くずれてしまったものを言う。

(12) 斫削　しゃくさく。品質が良くなくてくだけているもの（砕）を言う。

(13) 纔末　船が波にゆられる（簸揚、簸颺に同じ）ことにより、塵のようになったものを言う。

以上の趙汝适の分類は葉庭珪と同じで、趙汝适が引用したものであろうと思えるが、両文に幾分異なる点もあるようなので次に考えてみたい。

まず『諸蕃志』・(c1)の「……言収時貴重之置於鉼中……」についてヒルト、ロックヒル両氏は次のように英訳されている。(10)

The next quality is called *p'ing-hiang* (鉼香) or 《potted incense》, so called, they say, owing to its being prized so much at the time of gathering, that it is placed in pots (p'ing 鉼). In this *p'ing-hiang* (variety of frankincense) there are three grades, superior, medium, and inferior.

葉庭珪・(c2)では「……言収時量重置于瓶中……」となっていた。英訳文によると(3)～(5)のランクに入る鉼香のみが採取時貴重（高価）なので鉼に入れられたように受けとれる。もしもそうだとするならば(1)と(2)のランクの揀香と鉼乳はどのような容器に入れられたのであろうか。英訳文からはよくわからない。(2)の鉼乳も「鉼」という文字が使用されているので瓶の中に入れられたのではなかろうかと思える。葉庭珪・(c2)は収時に量が重いものを瓶の中に入れる

と言う。趙汝适から見た場合は量が重いものすなわち「貴重」（高級品）となったのではなかろうか。いづれも意味するところは同じように思える。そこでこの場合は分類表で述べたように(1)から(5)までの高級品が瓶の中に入れられたと考えることができないであろうか。そしてそれにつゞく(6)～(8)のランクの〔中級品〕袋香は袋の中に入れられた乳香であろう。それにつゞく(9)～(13)の品質の悪い〔下級品〕の乳香はどのような容器に入れられたのかは記されていない。おそらく瓶や袋以外の容器であったであろうと思える。

餅は瓶（かめ）のことであろうと思えるが、ガラス製の瓶も使用されたようである。たとえば宋代『島夷雑誌』に次の一文がある。(11)

大食勿抜国辺海。天気暖甚。出乳香樹。他国皆无其樹。逐日用刀斫樹皮取乳。或在樹上或在地下。在樹自結透者為明乳。蕃人用琉璃瓶盛之、名曰瓶香。在地者名塌香。

この文によると乳香は「瓶香」と「塌香」の二つに区分されている。樹に刀で切り傷（斫）をつけるとその部分に透き通って見えるゴム状の塊ができるので「明乳」と名づけられたようであるが、産地の住民がこの明乳を琉璃瓶に入れたことから「瓶香」と言われたと言う。塌香は葉庭珪・(C2)によれば「乳榻蓋鎔榻在地雑以沙石者」と説明されていた。このように、樹から乳香がとけて落（塌）ちて沙石とまじったものが乳榻すなわち塌香と呼ばれている。塌香については宋、沈括『夢渓筆談』・巻二十六、薬議の条にも次のように説明されている。(12)

薫陸、即乳香也。本名薫陸。以其滴下如乳頭者謂之乳頭香。鎔塌在地上者謂之塌香。

(二)　麻離抜国人の服装と家屋（本文・(C)の考察）

本文(B)の物産と商品については乳香以外は省略して、次の本文・(C)について考えてみたいと思う。文意は次のように考えられる。

「国王、官吏、人民はすべて天（イスラム教）につかえている。官吏と資産家はすべて金線桃花の帛（絹織物）を頭に纏っており、頭のうしろ（項）に白越諾金字布（金文字を押した布）をのせて衣としている。あるいは

諸色錦を衣としている。紅皮を履(はきもの)としている。そして、五階建の楼(高殿)に住んでいる。」

代答と同じく『諸蕃志』にも乳香の産地として麻囉抜国(麻離抜国)が述べてあったが、麻離抜国の専条はなかった。しかし、同じ地方を含みそれよりもかなり広い範囲にわたる領域を有していたと思える国として巻上に勿抜・中理国が述べてある。[13] いわく、

王紫棠色纏頭、衣衫。……

……国人露頭跣足、纏布不敢着衫、惟宰相及王之左右乃着衫、纏頭以別。王居用磚・甓・甃砌。民屋用葵・茆・苫蓋。

この文によると「国王は紫棠色(赤むらさき?)の〔ターバン〕を頭にまいており、着物(衫)を着ている。一般国民はターバンもまかず、素足で歩く。そして〔身体には〕布をまとうだけで決して着物は着ない。何ぜならば宰相と王の側近のみが着物を〔ゆるされ〕、頭にターバンをまくことで、〔一般人民との〕区別がつけられているからである。王の住居は磚(煉瓦)、甓(敷がわら)、甃砌(石を切った

もの)で作られており、人民の住まいは葵(樹木のある種)を〔柱に〕使用し、茆と苫(草のある種)で屋根をおゝっている。」という意味になると思える。

「王紫棠色」についてヒルト、ロックヒル両氏は、'The king is of a dark brown complexion,' と英訳されている。[14] すなわち、王の顔色がダーク・ブラウンということであるが、私には「王〔以〕二紫棠色〔布〕一纏レ頭」という意味ではなかろうかと思えるが如何であろうか。というのは、この傍線の部分は王と王を中心とする上層部の服装と一般人民との服装の区別が述べられているように思えるからである。識者の御教示を願うものである。

ドゥファール地方の住民の服装については十四世紀のイブン・バットゥータの『旅行記』にも説明がなされている。いわく、

「ザファール Zhafâr の住民は物腰が慎ましやかで、良い性格に恵まれ、高潔であり、外国人には好意的である。彼らの着物は綿で作られているが、インドから輸入される。そしてパンツ(=ズボン)を使用するかわりに腰

巻をつけている。大部分の〔住民〕はただ単に身体に一枚の布を巻きつけているだけで、酷暑をさけるためにもう一枚の布を背中にかけている。住民は日に何度か体を洗う。この町には沢山のモスクがあり、各モスクには体を清める為の多くの小室がある。ザファールでは絹、綿、また亜麻（リンネル）から非常に美しい織物が作られる。」(15)

(三)　食生活と酒（本文・(D)の考察）

本文・(D)は次のような意味になると思える。

「〔官吏と資産家は〕麺餅（麦粉に砂糖・バター・牛乳等をまぜて焼いたもの）、肉、酪（ちちざけ、乳漿）を食べる。貧者は魚と蔬（野菜）を食べる。この地方には稲や米は少ない。この地で産する果実はあまく（甜）て酸味がない。蒲桃（ブドウ）で酒を作っている。砂糖と香薬を煮て思酥酒を作る。密と香薬をまぜあわせて眉思打華酒を作るが、これは体をあたためるために有益である。」

食物について『諸蕃志』の勿抜・中理国の条には次のように記されている。

日食焼麺餅、羊乳、駱駝乳、牛羊、駱駝甚多。大食推此国出乳香。……

また、明の『瀛涯勝覧』に次の記述がある。(16)

此処気候常如八九月、不冷。米、麦、豆、粟、黍（きび）、穄（きび）、麻穀（胡麻のことであろう）、乃諸般蔬菜、瓜茄（うりとなすび）、牛、羊、馬、驢、猫、犬、雞、鴨之類。

黍と穄は同類ではなかろうかと思われる。明末、宋応星の『天工開物』（崇禎十年、一六三七）、巻上、乃粒第一巻、黍穄・粱粟の条に「凡黍與穄同類、粱與粟同類、黍有粘不粘、粘者為酒、穄有粳無粘」とあり、また、麻穀については、同じく、麻の条に「凡麻可粒可油者、惟火麻（大麻の異名）、胡麻二種」とある。(17)

また、明の費信『星槎勝覧』（紀録彙編本）、佐法児国（ドゥファール地方）の条に次の記述がある。(18)

田広少収、山地黄赤、亦不生草木、民捕海魚曬乾、大者人食、小者餵養牛・馬・駝・羊。

この文によると、人民は海の魚を取り日ぼしにし、大魚は自分達が食べ、小魚で牛、馬、ラクダ、羊を餵養（餵養、

飼育すること）すると言う。駄獣を魚で飼育する話は、中国史料のみならず、十四世紀のイブン・バットゥータの『旅行記』にも述べてあるので、食物の話と共に次に引用してみたい。

「ザファール Zhafâr の町は沙漠の平原の中にあり、〔多くの〕村落をしたがえている。市場は町の外に位置し、'Hardjâ' と呼ばれる城外にある。そして、そこは非常にきたない市場で、非常に臭く、蠅が充満している。というのは驚くべき多量の果物と魚が売られているからである。魚の多くは鰯で驚くほど油が良く乗っている。不思議なことに〔この国では〕駄獣と牝羊がこの鰯で飼育されていることである。私はこのようなことを他の国では見たことがない。市場の小売人はすべて女の奴隷であり、黒い着物を着ている。

ザファールの主な栽培〔食物〕は粟（*dhourah*）で、非常に深い井戸から水を汲み利用する。その方法といえば、並はづれた大きさの手桶を準備し、桶に幾つかのヒモを結び〔一本によりあわせる〕。そのヒモの〔先の〕一本〳〵を男の奴隷と女の奴隷各人が、各人の体につけている帯に結びつける。そして、各人がたがいに井戸の上におかれた大きな材木の一片に〔よりあわせた〕ヒモをかけながら〔各自のヒモを引き〕手桶を引き上げるのである。〔この地には〕小麦のある種があるが、それは 'alas' とよばれる。しかし、実際は大麦の一種である。米はインドからこの国に輸入されるが、住民の主な食糧である。この町の dirhem（ディルハム貨幣）は銅と錫の合金で、他の地では流通しない。〔この地の〕住民は商人で、もっぱら貿易で生計をたてている。」(19)

次に麻離抜国の酒について簡単に述べてみたいと思う。『嶺外代答』本文・(D)では、ブドウ酒と、砂糖と香薬を煮て作る思酥酒、密と香薬から作られる眉思打華酒の三種類が述べてあった。マルコ・ポーロの Eshier 国の条ではブドウ酒はなく、砂糖・米・なつめやしから一種の酒を作るとあった。『諸蕃志』巻上、大食国の条にも代答、麻離抜国に述べてあった三種の酒の記述がある。いわく、

民食専仰米穀、好嗜細麪、燕羊、貧者食魚、菜、菓実皆

甜無酸。取蒲萄汁為酒、或用糖煮香薬思酥酒、又用密和香薬作眉思打華酒、其酒大煖。

ヒルト、ロックヒル両氏は思酥 ssi 酒はペルシャ語の *sherbet, sharāb* であろうとされ、眉思打華酒については眉酒、思打酒、華酒（花酒）のことであろうとしておられる。[20]『諸蕃志』、勿抜・中理国の条にはこれらの酒の説明はなされていない。密や糖で作られる酒については『諸蕃志』、故臨国（インドの Quilon）[21]の条に「酒用二密糖一和二椰子花汁一醞成」とあった。

四、むすび

中国と大食間のインド洋諸国の中で宋代の重要な中継貿易港といえば、まづ、スマトラ島東南岸の三仏斉国（パレンバン地方を中心）とインド南部西岸の故臨国（キーロン）を上げることができよう。乳香等アラブ諸国の物産が中国へ運ばれる場合はまず故臨国へ持たらされ、故臨から三仏斉国へアラブ船、インド船、三仏斉船等マレー諸島の船で運ばれたようである。三仏斉の港には中国人の欲するアラブ諸国等の物産が多く集ったことであろう。たとえば、『諸蕃志』、三仏斉国の条につぎの一文がある。

土地所産瑇瑁、脳子、沉・速・暫香、粗熟香、降真香、丁香、檀香、荳蔻。外有真珠、乳香、薔薇水、梔子花、腽肭臍、没薬、蘆薈、阿魏、木香、蘇合油、象牙、珊瑚樹、猫児睛、琥珀、番布、番剣等皆大食諸蕃所産萃於本国。番商興販用金、銀、甕器、錦、綾、繒絹、糖、鉄、酒、米、乾良薑、大黄、樟脳等物博易。

この文によると、土地（三仏斉）産するところの物産が瑇瑁から荳蔻まで記してあり、正確に言えばほとんど三仏斉（パレンバン地方）以外の産物のようであるが、[22]次の「外有……」という物産と比較するとマレー諸島を主とする物産が「土地所産……」とされているようである。そして「外有……皆大食諸蕃所産萃於本国」とある物産は乳香をはじめアラブ諸国に産するものだと述べてあり、「萃於本国」とはアラブ諸地域の物産がまづ本国（この場合はアラブ諸国の首都を意味しているようで、バグダード地方のことと思える）[23]に集められ、それが中継貿易国家三仏斉に持たらさ

れたということではなかろうかと思える。次の「番商興販……」の品物はマレー諸島の物産やアラブ諸国の物産との交易に用いられた商品のことであろう。

このようにアラブ商人やインド商人等西方からやって来る貿易商人にとって三仏斉は重要な貿易港で、この港に来れば（あるいは来るようしむけられた）[24]必要な商品を多く購入できたように思えるが、中国商人にとっても三仏斉は西方の物産を購入する為に重要な国であったように思える。中国商人にとっては遠くアラブ諸国にでかけなくとも三仏斉で必要な物産が購入できたように思え、インドやアラブ諸国まで航行する中国船の数は「中国――三仏斉」間航行の中国船の数とくらべるとかなり少なかったのではなかろうかと思える。中国商人にとって大食はやはり遠い国であったであろう。たとえば北宋、徽宗の宣和元年（一一一九）の作[25]、朱彧の『萍洲可談』巻二に次の文がある。[26]

海南諸国各有酋長。三仏斉最号大国。有文書、善算。商人云日月蝕亦能預知其時。但華人不暁其書爾。地多檀香、乳香以為華貨。三仏斉舶賫乳香至中国。所在市舶司以香

係権貨抽分之外尽官市。

近歳三仏斉国亦権檀香令商就。其国主售之直増数倍、蕃民莫敢私鬻其政亦有術也。

是国正在海南。西至大食尚遠、華人詣大食至三仏斉、修船転易貨物。遠賈輻湊故号最盛。

中国商人が大食国に行こうとすればまづ三仏斉に入港し、船を修理するとともに貨物を交易したという。その後は代答・巻三（前稿・(一)）に述べてあったように藍里に寄港し、さらに故臨等に航行したようである。また三仏斉国には遠方からの賈人（アラブ、インド商人等）も輻湊し、「最盛」と号されたような豊かな貿易国家であったと言う。そして、三仏斉に集まった乳香は三仏斉船で中国の港に持たらされたとしている。それは葉庭珪の『香譜』・(b_2)にも述べられていたし、『諸蕃志』・(b_1)では番商（諸国の貿易商人）がやって来たと記されていた。

三仏斉等の貿易船が中国の港に入港すると、その地の市舶司は当時政府の専売品（権貨）になっていた乳香の一部分を征税として入庫し、のこりは官市（貨物の政府による

買上げ）とし、京師の榷易院に発送され、榷易院はこれを民間に出売したという。(27)

乳香は宋代中国の輸入品の中で重要な物産であったようで、それは葉庭珪『香譜』、『諸蕃志』、『萍洲可談』の記述からもうかがえた。また、『粤海関志』巻三引く畢沅『中書備中』（元豊三年、畢仲衍の書）を見てもその輸入量の多いことがわかる。たとえば、熙寧十年（一〇七七）に明州、杭州、広州の三市舶司に入庫された乳香の合計は三十五万四千四百四十九斤で、そのうち広州がもっとも多く、三十四万八千六百七十三斤を収めている。その内訳は、

四色瓶香	二十一万七千九百九十五斤
三袋香	一十万四千九百六十三斤
黒塌香	一万五千四百五十斤
水溼黒塌香	一千二百一十七斤
散纏香末	九千四十八斤

となっている。(28)

乳香はアラビア南部ドゥファール地方に産し、『嶺外代答』は麻離抜国に産すると伝え、『諸蕃志』は麻囉抜（Mirbāṭ）、施曷（Ash shihr）、奴発（Dhofar）三国の深山に産出すると伝えた。乳香とは樹脂のことで、乳香樹の幾つかの部分に切りきづをつけて採取するようで、その切口から樹液が雫りかたまったものがそれであるという。乳香が中国の港に持たらされると各市舶司はそれを大きくわけて三つに区分していたようである。『諸蕃志』によると、㈠は餅（壺）に入れられた乳香で(1)～(5)までのランクがあった。㈡は袋香で袋の中に入っている乳香を言い、(6)～(8)のランクがあった。㈢はそれ以外の粗悪品で(9)～(13)のランクが付けられていた。(1)は揀香あるいは滴乳と言われ、(2)は餅乳、(3)～(5)は餅香、(6)～(8)は袋香、(9)は乳榻、(10)は黒榻、(11)は水湿黒榻、(12)は斫削（しゃくさく）、(13)は纏末（てんまつ）と言われた。

註

（1）J. Inners Miller, *The Spice trade of the Roman Empire*, 29 B.C. to A.D. 641 (Oxford, 1969), pp. 102-103.

（2）和田久徳「南蕃香録と諸蕃志との関係」（お茶の水大学『人文科学紀要』第十五巻、昭和三十七年）。山田憲太郎『東亜香料史研究』（昭和五十一年二月）、七三―七五頁。

（3）Friedrich Hirth and W. W. Rockhill, CHAU JU-

KUA: *His work on the Chinese and Arab Trade in the twelfth and thirteenth Centuries, entitled Chu-fan-chï*, Translated from the Chinese and Annotated (ST. PETERSBURG), pp. 195-197., P. Pelliot, "Bulletin Critique," *T'oung Pao*, 13 (1912), pp. 475-480.,山田氏′ 前掲′『東亜香料史研究』′ 八九一九四頁。

(4) 池永佳昭「『嶺外代答』の麻離抜国と乳香・(一)」(『史学』四十八巻四号)′ 三一頁。以下′ 麻離抜考・(一)とする。

(5) F. Hirth and W. W. Rockhill, *Chau Ju-Kua*, p. 121, n. 12.

(6) L. F. Benedetto, *The Travels of Marco Polo*, translated into English from the text of L. F. Benedetto by Professor Aldo Ricci with an Introduction and Index by Sir E. Denison Ross (London, 1931), pp. 354-355.

(7) F. Hirth and W. W. Rockhill, *Chau Ju-Kua*, p. 121. 池永′ 麻離抜考・(一)′ 三三一三四頁。

(8) L. F. Benedetto, *The Travels of Marco Polo*, pp. 356-357.

(9) Paul Wheatley, "Geographical Notes on Some Comodities involved in Sung Maritime Trade," *Journal of the Malayan Branch of the Royal Asiatique Society*, vol. 32 (1959), p. 47.,山田氏′ 前掲′『東亜香料史研究』′ 一一六頁′ 注九。

(10) F. Hirth and W. W. Rockhill, *Chau Ju-Kua*, p. 195.

(11) 元禄十二年(一六九九)和刻本(新編事林広記・巻八所収′ 慶応大学図書館蔵本)によった。この刊本は元泰定二年(一三二五)の覆刻で′ 現行諸本の中で最も古い形を存すると考えられるという(和田久徳「宋代南海史料としての島夷雑誌」′ お茶の水大学『人文科学紀要』′ 第五巻′ 昭和二十九年′ 五三頁)。

(12) (宋)沈括撰′ 胡道静校注′ 新校正夢渓筆談′ 一九七五年一月′ 二七〇頁。

(13) 現行『諸蕃志』(函海本′ 学津討原本)では勿抜′ 中理の二国に区分されているが′ 前述『島夷雑誌』と比較すると元来(趙汝適出版時の『諸蕃志』)勿抜一国になっていたのではなかろうかと思える(和田氏′ 前掲「宋代南海史料としての島夷雑誌」′ 五〇頁′ 注(48))。

(14) F. Hirth and W. W. Rockhill, *Chau Ju-Kua*, p. 130.

(15) C. Defrémery et le Dr. B. R. Sanguinetti, *Voyages d'Ibn Batoutah*, texte arabe, accompagné d'une traduction (1892), 2 vols, pp. 198-199.

(16) 馮承鈞校注′ 瀛涯勝覧校注′ 中華民国二十四年(一九三五)′ 五十四頁。

(17) 宋応星′ 天工開物′ 商務印書館印行′ 中華民国五十六年(一九六七)′ 六一七頁。

(18) 馮承鈞校注′ 星槎勝覧校注′ 後集′ 中華民国二十七年(一

九三八）、一九頁。

(19) C. Defrémery et B. R. Sanguinetti, *Voyages d'Ibn Batoutah*, pp. 196–198.

(20) F. Hirth and W. W. Rockhill, *Chau Ju-Kua*, p. 120, n. 6. 藤田豊八博士「宋代の層檀国について」（『東西交渉史の研究』・南海篇所収）、二六六―二六七頁参照のこと。

(21) 池永、麻離抜考・(一)、三一頁。

(22) 山田氏、前掲、『東亜香料史研究』、五四―五五頁。

(23) 宋末、元初の馬端臨撰『文献通考』（巻三三九）、大食国の条に「政和中（一一一一―一一一七年）……本国所産多運載與三仏斉貿易。商賈転販至中国。」とある。

(24) 池永佳昭「『諸蕃志』の賓窣国と竜脳」（『史学』四十八巻・一号、昭和五十二年一月）、三五頁。

(25) 桑原隲蔵『蒲寿庚の事蹟』（桑原隲蔵全集、第五巻、昭和四十三年十月）、六八頁、一一〇頁。

(26) 清・銭熙祚編、守山閣叢書、清光緒一五年上海鴻文書局用道光二四年金山銭氏本景印、第九十一冊、萍洲可談による。

(27) 桑原博士、前掲、蒲寿庚、二〇七―二〇八頁。

(28) 粤海関志、清関名撰、中華民国二十四年（一九三五）、北平文殿閣書荘拠道光年中刊本排印、国学文庫、第二十一冊、八〇―八一頁。山田氏、前掲『東亜香料史研究』、一〇三―一〇六頁。桑田六郎「宋と大食」（『石浜先生古稀記念・東洋学論集』、一九五八年）、二一四―二一五頁。